The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	レイモンド・ウィリアムズ研究
Author(s)	吉澤, 弥生
Citation	大阪大学, 2003, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/44171
rights	
Note	著者からインターネット公開の許諾が得られていないため、論文の要旨のみを公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

【12】

氏　　名	吉　澤　弥　生（よしざわ　やよい）
博士の専攻分野の名称	博　士（人間科学）
学　位　記　番　号	第　１７４８２　号
学位授与年月日	平成 15 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第４条第１項該当 人間科学研究科社会学専攻
学　位　論　文　名	**レイモンド・ウィリアムズ研究**
論　文　審　査　委　員	（主査） 教　授　伊藤　公雄 （副査） 教　授　木前　利秋　　助教授　川端　　亮

論　文　内　容　の　要　旨

本論文は、20 世紀後半のイギリスを代表する文化研究者レイモンド・ウィリアムズが生涯を通しておこなった、研究の輪郭とその豊かな内実をいくつかの角度から描き出すことを狙いとしている。

レイモンド・ウィリアムズは 1921 年、ウェールズの辺境の村で生まれた。のちに奨学生としてケンブリッジ大学トリニティ・カレッジに進学し、英文学の修士を取得。４年半の兵役を経て、終戦時にケンブリッジに戻る。修了後はオクスフォード大学公開講座の成人教育の講師を務める傍ら、研究と執筆活動を続ける。61 年にはケンブリッジ大学ジーザス・カレッジの研究員、74 年には同大学演劇学の教授に就任し、83 年に退官。88 年に死去。

ウィリアムズが研究対象としたのは、文学、演劇から雑誌、映画、テレビ、さらにモダニズム芸術も含む、広大なイギリス現代文化のフィールドである。彼はそれを、より広いイギリス現代社会というフィールドと慎重に重ね合わせた。ウィリアムズはこの複雑でしばしば見えにくい「文化と社会」の関係を、少しずつ丹念に記述し考察した。

ウィリアムズは、近年国際的な広がりをみせているカルチュラル・スタディーズの創始者のひとりとして知られている。しかしこうした視点でのみウィリアムズを捉えようとすると、彼の全体像が歪められてしまう危険がある。初期の代表作『文化と社会』が批判的文化研究なのは確かだが、彼はそれを何に対する「応答」として書いたのか、またメディア研究、「文化社会学」構想など、明らかにされていない点が多くある。そもそも日本では包括的な「ウィリアムズ研究」は今のところ存在しないというのが実状である。

本稿は、ウィリアムズの根底にある一貫した「文化と社会」に関する分析を時代の変遷とともに描き出すことを目指す。第２部では、ウィリアムズの初期の著作を彼が身を置いていたイギリスの状況とともに検証する。彼が『文化と社会』で描いた文化概念の変遷は、功利主義、自由放任主義に支えられた産業主義に対する、アンチテーゼとしての概念の歴史だった。そして「地」として描かれたイギリス社会思想・社会科学の歴史には、確かに「ブルジョア社会観念」の系譜と中産階級によるフェビアン主義があった。そしてこの時代ウィリアムズは、問題意識の核心「労働者階級」をめぐる社会や文化の問題、つまり「階級」という争点において「ブルジョア社会観念」の歴史と同じ議論の場に乗る。文化と社会を、そして文化と階級を、それぞれ結合させた点でウィリアムズの功績は大きい。第３部では、彼のおこなった文化研究について、演劇・文学とメディアという２つの柱を軸に検証する。生活様式の総体としての文化概念、「感情の構造」や「形式」を駆使した批評、技術の文化形式の相互関連の照射などをみていく。第４部では、ウィリアムズが 80 年代前後に提示した「文化社会学」を中心に検討するとともに、その時代の彼の社会と

の関わり方をみていく。ウィリアムズは具体的な研究と平行してさまざまな立場や思想を検討し、「文化社会学」を構想するに至る。それは文化生産（と分配）の社会学であり、また過程、関係を照射することが重視されている。彼は当時流行中のカルチュラル・スタディーズ（ディシプリンを必要としない）や人間の主体性を軽視するさまざまな考え方への「抵抗」として、文化社会学を構想したといえる。

ウィリアムズは、政策立案や調査に関与するよりも文化研究や教育の現場に身を置くことを選択し、また「ブルジョア社会観念」の系譜にあるさまざまなものに対峙し抵抗し続けた。またウィリアムズは、物事の「関係」やそれが形成される「過程」を重視し、階級・平和・女性・環境といった社会的不平等の問題について思考し、議論し、行動した。こうしたきわめて原理的な意味においてウィリアムズは社会学的であったといえよう。

論文審査の結果の要旨

本論文は、20世紀のイギリスを代表する文化研究者であるレイモンド・ウイリアムズについて、その全体像を描きだす目的で執筆されている。ウイリアムズについては、日本でも、イギリス文化史やカルチュラル・スタディーズなどの視点から、多くの研究者が考察の対象にしてきたが、これまでその全体像を描こうとした試みはほとんどみられず、その意味でも、本論文の意義は大きいものと考えられる。

ウイリアムズ独自の文化概念を明らかにするとともに、「感情の構造」などの概念についても目配りよく分析が加えられており、さらに、晩年の文化社会学の構想に関しても、巧みな交通整理がみられる。

また、単に彼の思想を整理したにとどまらず、それを彼が生きたイギリス社会の歴史的変化のなかに位置付けるという思想史的な作業を行うことで、ウイリアムズの思想をより立体的に描きだすことにも一定成功したといえる。

膨大な文献にあたり、ウイリアムズの思想の全体像を、文化社会学的関心から描き出した本論文は、これまでの研究に新たな知見を加えたという点で高く評価できる。

以上の理由から、本論文は博士（人間科学）の学位授与に値すると判定した。